

たことからだといわれている。それは、平瓦を並べただけなので、継ぎ目部分から雨が入り、雨漏りの原因となっていた。

江戸初期、近江国おうみのくに（現在の滋賀県）の西村半兵衛が、平瓦の端に山（棧）を付けて重ね合わせて葺くことの出来る、軽量で安価な一枚瓦を生み出した。（関西では地瓦、瓦職人は和型瓦ともいう）この瓦を用いて葺かれた屋根を「棧瓦葺き」と言い、これにより瓦屋根の普及が加速したと考えられる。また、本瓦葺きに比べて簡単に葺けるので、関西では、「簡略葺き」ともいわれており、現在は寺院などを除きこの葺き方が主流となっている。

住吉の瓦

瓦は、その土地の土を使うのが一番良いと言われている。住吉でも昔は、周辺の田圃たんぼの床土の上澄み粘土で瓦を製造していた。現在でも「住瓦庄」かわらしょうこと、住吉瓦屋庄右衛門（のちの丹司製陶株式会社・今のアサヒ衛陶株式会社）で焼かれた「住瓦庄」の刻印のある瓦も見られる。



「住瓦庄」刻印

また上町台地の空堀あたりの土では、大坂城や町家の瓦が造られていた。斜面の地形をうまく利用してつくられた登り窯で焼かれていた。1000度を超える高温で焼かれるので堅くて持ちが良く、現在まで残っている。

町名に「瓦」の文字が残っているところは、瓦の窯や土取場があり瓦の生産が行われた所の名残で、中央区の瓦屋町などがその例である。

瓦の基本的な葺き方

瓦の下地は、厚み七分～八分（21～24mm）の「野地板」に「トントン」と呼ばれる杉等の薄板を重ね葺き、その上に葺き土を五寸（15cm）から一尺（30cm）程度載せる。そうしなければ火災時、屋根面からの熱により、内部に熱がこもることになる。この葺き土の上に平瓦を並べている。平瓦の「働き（表面上見えている大きさのこと）」は、平瓦の全長約一尺（30cm）から一寸（3cm）引いて半分重ねるように葺く。このように葺いておけば、表面の瓦が割れても下の瓦が水を受けるので、雨漏りがしにくくなる。より働き幅を短くして、三枚重ねとすることもある。



本瓦屋根

瓦葺きの土は、土と藁を混ぜてこね、藁の表面が腐って繊維のみが残る程度まで、少なくとも三カ月から半年、時に一年ほど寝かせたものを使う。土壁に使うものとはほぼ同じである。寝かせ方が不十分だと藁が腐って瓦の重みで下がり、ずれて雨漏りの原因となる。

重要文化財では、その土の上を南蛮漆喰で固めることもあり、このようにすれば、百年以上もつ屋根ができる。南蛮漆喰とは石

灰、布海苔、砂を混ぜたもので、一種の接着剤の働きをするものである。職人さんが良かれと思って、丸瓦の空洞部分に土を多めに入れて葺くと、土の中の藁が雨を吸い、雨漏りの原因となることがある。

住吉の蔵の屋根には、紐丸瓦が両妻際や軒近くに二列、額縁のように入っているのが見受けられるが、特に決まりはなく、デザイン的な意味合いと暴風時の対策と考えられる。軒先の巴瓦二列分は、棕櫚繩しゅうなわで引っ張られている。この巴瓦（軒先の丸瓦。水の渦巻くような巴模様が入ったものが多い。）の基本寸法は八寸（24cm）だが、施主の要望でより長い「尺巴」や「長巴」といったものを使用することもある。このように軒先の瓦の意匠もいろいろと見られ、重みを感じられる。

ケラバの納まりについて

蔵は殆どが切妻屋根である。切妻屋根の妻側の瓦の山形に見える部分をケラバけらば（螻蛄羽）けたばと言い、桁端からの転訛である。ケラバの納め方も職人のこだわりの部分である。ケラバは平瓦を段積した平袖瓦、L字



平袖瓦

型やT字型などの「刻袖瓦」きざみそでがわら、軒先で見られるような軒瓦をケラバに使う「掛け瓦」、漆喰で仕上げる「棒漆喰」などがある。

「刻袖瓦」の納まりは、下から見上げたとき

に、いかに一枚の板のように見せるかが職人の技で、特にT字型は、瓦一枚一枚の形が均一でないため職人が苦労する部分である。



刻袖瓦（L字型）



掛け瓦



棒漆喰

「棒漆喰」は左官の仕事で、平瓦が風に煽られ、飛ばされないように塗られたものである。この棒漆喰を含め、面戸めんど（隙間）やケラバの漆喰塗りは、左官職人の力量の間われるところでもある。

帝塚山近辺の蔵には、「棒漆喰」で仕上